



# INFOS

日仏整形外科学会広報誌

アンフォ

- |  |  |   |
|--|--|---|
| ■名誉会長……………七川 勲次<br>Président d'honneur — K. SHITIKAWA                                      | ■会長……………小林 晶<br>Président — A. KOBAYASHI             | ■副会長……………瀬本喜啓<br>Vice-Président — Y. SEMOTO |
| ■書記長……………大橋弘嗣<br>Secrétaire général — H. OHASHI  | ■書記・会計……………弓削 至<br>Secrétaire et Trésorier — I. YUGE | 青木 清 藤原憲太<br>K. AOKI K. FUJIWARA            |
| ■幹事……………坂巻豊教 金子和夫 安永裕司 久保俊一<br>Membre exécutif — T. SAKAMAKI K. KANEKO Y. YASUNAGA T. KUBO | ■名誉会員……………小野村敏信<br>Membre d'honneur — T. ONOMURA     |   |

- 事務局：〒 530-0012 大阪市北区芝田 2 - 10 - 39 大阪府済生会中津病院内（係：大橋弘嗣）  
Tel. (06) 6372-0333 Fax. (06) 6372-0339  
Bureau : Maison d'édition: Saiseikai Nakatsu Hospital, Shibata, Kita-ku, Osaka 530-0012 JAPON
- 発行所：〒 530-0012 大阪市北区芝田 2 - 10 - 39 大阪府済生会中津病院（編集者：大橋弘嗣）  
Tel. (06) 6372-0333 Fax. (06) 6372-0339  
Maison d'édition: Saiseikai Nakatsu Hospital, Shibata, Kita-ku, Osaka 530-0012 JAPON (Éditeur : H. OHASHI)
- ホームページアドレス：http://www.sofjo.gr.jp



2010.3.31  
VOL. 20

## 年頭の言葉

会員の皆様には麗しく2010年をお迎えになったこととお慶び申し上げます。

昨年(2009年)は第10回AFJOを沖縄で開催し、大成功を収めることができました。これは大橋弘嗣先生の議長としての見事な準備と采配、および会員の皆様の絶大な協力によるものと、厚くお礼申し上げます。

フランス側も所期の希望通り沖縄の訪問を大変喜んでおりましたし、発表演題の内容も豊富で実り多いものばかりでした。

「かりゆし」姿で気楽に歓談し交流できたことも収穫の一つでした。南国の雰囲気が充満している庭園でのパーティが、折りからの雨で流れたのが唯一の計算

違いでしたが、これは南国の風情として止むをえません。室内でのパーティに変更になったとはいえ、盛り沢山の沖縄の芸能を満喫できたのも、フランス側を喜ばせました。

次回の第11回AFJO(2011年)はフランス南西部のボルドーで開催予定です。ご承知の通り、周辺はワインのシャトーが無数にあり、世界的なワイン生産のメッカです。歴史的に話題の豊かな所でもあります。多くの古い教会があり、普仏戦争、第一次世界大戦および第二次世界大戦では臨時政府が置かれた、政治的に重要な場所です。学問的な意味を含めて、皆様が堪能できる都市ですから、今から準備をしておかれるとよいと思います。私事です



## 小林 晶

が、私が住んでいる福岡市とボルドー市は姉妹都市で、長い間提携の委員長を命じられ度々訪問したことがあります。ボルドー市の市長としてシャパン・デルマス、アラン・ジュペなど首相を務めた大物政治家があり、政治基盤はフランスでも重要な地位を占めています。

さて、今年(2010年)9月は広島で第14回SOFJOが、安永裕司広島大学教授のお世話で開催されます。皆様にお会いできるのを、今から楽しみにしております。

これとは別に画期的なフランス側の提案がありました。例年のように11月にパリで開催されるSOFOT(フランス整形災害外科学会)で、日仏共同のセッションが開催されることが決定しました。テーマは「患者の運動と自立」(le mouvement et l'autonomie au patient)となっています。SOFOTを構成する組織にAOT(Académie d'Orthopédie et de Traumatologie)があり、会長であるJ.Caton先生の発案で、わが国と合同セッションを行いたい計画を手紙で受け取りました。詳細については続報が来ると思いますが、今までにない絶好の大きな機会であり、是非この会に参加したいと考えております。私個人の意見としては、参加したい旨のお礼の連絡をCaton先生にしておきました。

以前本誌で会長就任の挨拶として、懸案事項のことを申し上げました。その一つとして日本整形外科学会

との連携を深めることがあります。私たちの学会の歴史、存在意義を述べ、日整会と連携の強化を、日整会宛に要望事項として申請しておりました。

やっと昨年(2009年)12月、理事長および国際委員長名で返答がありました。それによりますと、われわれの学会は日整会の下部組織とは認められない、告知事項は従来通り日整会誌の色刷りページに掲載を、ということでした。理事会における議論の過程は全く解りませんが、フランス側ではSOFOTが全面的にAFJOを後援していることを考えますと、残念な気がいたします。この辺の事情はゆっくりと機会あるごとに、日整会の理解をえるように努力したいと思っています。

第二の懸案の財政の健全化については、具体策を見出すのはかなり困難な状況です。経済状況は悪化するばかりで、大きく企業に依存する時代ではなくなりました。役員の方にかかなりの努力をして戴いていますが、会員の先生方も会の発展のために多少なりとも関心を持って戴きますように念願しております。

最後になりましたが、七川欽次先生、小野村敏信先生には大変お元気で、本学会を見守って戴いており慶賀にたえません。

会員の皆様のご健康と本学会の発展を、心から祈念して措辞といたします。



## 第10回日仏整形外科合同会議を開催して

# 沖縄で奏でた日仏友好のハーモニー

第10回日仏整形外科合同会議 (10ème Réunion de l'AFJO) を2009年5月28日(木)～30日(土)の3日間、沖縄県宜野湾市の沖縄コンベンションセンターで開催させていただきました。本会議は1990年にパリで第1回が開催された後、2年ごとに日本・フランスで交互に行われてきました。今回はフランス側からの強い希望があり、沖縄で行うことになりました。フランス人のコートダジュール好きから分かりますように、暖かくて海のあるところを好まれるようです。

さて、沖縄へはフランスから20名、日本から112名の先生方および同伴の方々をお迎えしました。梅雨は明け、夏の日差しの沖縄ではほぼ好天に恵まれましたが、熱帯気候特有のシャワーにはときどき悩まされました。招待講演を日仏両国からひとつずつ企画し、83の口演発表と、39のポスター発表を2つの口演会場とポスター会場で行いました。公用語は英語としていますので、会議での発表、討論、アナウンス等はすべて英語でしたが、夕食会やツアーなどではフランス語も入り交じり(日本語通訳付き)、やはり日仏整形外科らしい雰囲気でした。

**【招待講演・発表】** 会議は日仏整形外科学会会長の小林晶先生の開会の辞で始まり、午前中に今回の会議のテーマとした「整形外科における新技術」のひとつであるナビゲーション手術・コンピュータ支援手術のセッションを持ちました。この分野はフランスが進んでおり、TKA、THA、脊椎外科におけるナビゲーション手術の関しての6つの発表がありました。発表はすべてフランス側からでしたが、日本の先生方も非常に興味を持って聞いておられました。その後は招待講演のひとつとしてパリ・ラリボアジュール病院 (Hôpital Lariboisière) のSedel先生がアルミナセラミック人工股関節の長期成績 (Ceramic-ceramic couple : A 38 years experience) について講演をしていただきました。アル



ミナセラミック人工股関節開発の歴史から現在までの長期成績について、最近話題となっているきしみ音などについて分かりやすくお話しをしていただきました。

昼食後はポスターセッションの時間を取りました。ポスターの前でも活発な討論が行われていました。午後の発表は二つの会場に分かれて行いました。どちらの会場も興味深い発表が多く、最後まで多くの先生が残って討論に参加されていました。結局、一日目にはTHA、股関節、ナビゲーション、TKA、膝関節、基礎、肩関節、肘関節、外傷、小児、腫瘍と幅広い分野の発表がありました。

今回は応募演題が多かったために二日目は8時15分から発表を開始しました。手の外科のセッションの後、二つ目の招待講演を琉球大学整形外科金谷文則教授に上肢のスポーツ障害 (Sports injuries of the upper extremity) について講演をしていただきました。沖縄の紹介も織り交ぜながら多くの症例を示して解説していただきました。その後、THA、脊椎のセッションがあり、会議の最後は日仏整形外科学会名誉会長の七川欽次先生の閉会の辞で締めくくられました。

本会議の特徴としては、ひとつの会場でさまざまな分野の発表が聞けることとフランス独自のアイデアが生かされた治療法、インプラントなどの発表が聞ける

ことです。今回も日本にはまだ入っていないナビゲーションやTHA、TKAのインプラントなどの発表も聞くことができ、たいへん勉強になる会でした。

**【夕食会】**日仏の先生方の友好を深める機会として一日目の夜に夕食会を開きました。沖縄ならではのかりゆしウェアを皆さんに着ていただき、会議とは違った雰囲気できつろいでいただけるようにしました。当初はプールサイドで予定していましたが、ちょうど始まる頃から南国独特のシャワーのような雨が降り出したために急遽ホテル内に移動するというハプニングがありました。南国のリラックスした雰囲気にも助けられて和やかな雰囲気、旧交を温めてきた知り合い同士は久しぶりの再会に話が弾み、また初対面同士も次第にうち解けあって、日仏両国間のより親密な関係を築くための良い交流の場となりました。

**【学会ツアー】**二日目の学会終了後、琉球村と東南植物楽園に観光に行きました。琉球地方の古い民家をゆっくりと巡り、芸能や自然を楽しみました。植物園ではハイビスカスなどの南国ならではの植物に加えて、ちょうど蓮が満開でした。カメラを片手に自由に散策するうちにいろいろな人同士が顔を合わせ、整形外科以外のことについても話が弾んでいました。

次の第11回日仏整形外科合同会議は2011年にフランス側の主催でボルドーで開催される予定となりました。議長はDurandea先生が努められます。ボルドーは景色、歴史、食事それにワインとたくさんの楽しみがありますので、是非多くの参加者が来られることを期待しますとおっしゃっておられました。

最後に第10回日仏整形外科合同会議を支えてくださった企業各社、日仏整形外科学会役員、会員および多数の関係の方々に深謝申し上げます。



## 第10回 日仏整形外科合同会議に参加して ボルドーでの再会の約束

2009年5月29日と30日に沖縄コンベンションセンターにおいて第10回日仏整形外科合同会議が開催され、出席する機会をいただきましたので報告させていただきます。

当会は日本とフランスで2年ごとに開催地を変えて行われており2年前はニースで、その2年前は京都で、その2年前はグルノーブルで、その2年前は大阪で、その2年前はリヨンで開催されており私はそのリヨンでの学会より参加させていただいております。これまでの印象としてフランス側は地方都市での開催を織り交ぜているけれども日本側は都市部(特に関西)での開催が多く、フランス側の参加者は少し食傷気味になられているのではと考えておりました。その流れでの今回の沖縄開催はまさに絶好のタイミングだったのではないかと思います。ただ遠隔地で開催するに当たり今回の会長である大橋先生は数回にわたり沖縄へ強行軍で下見や準備に行かれておりました。その苦労は大変なものであったと伺っております。しかしそのおかげですばらし

い会を沖縄の地で開いていただけましたことにこの場を借りてあらためて感謝させていただきたいと思います。

さて5月下旬の沖縄といえば海開きも済み絶好のシーズンとされますが、実は本州より一足早い入梅時期であり天候のことが心配されました。しかし今回は唯一プールサイドでのガラディナー時にスコールが降ったくらいであとは晴天に恵まれました。私は現地スタッフに任命されておりましたので学会前日に沖縄に乗り込み会場横のラグナガーデンホテルでの受付を行ったのですが、フランスの先生方が"Il fait beau!"といって意気揚々と学会観光ツアーから帰られてチェックインされていったのを思い出します。学会前日はウェルカムパーティーが開催され、通常の学会では口も聞けないような錚々たるメンバーが壇上にたたれて挨拶をされました。こういった先生方とも身近に接することが出来るのが本学会の良い点だと改めて感じた次第です。

翌日は朝より学会が始まるため、私はワインと泡盛



がマリアージュした脳を必死で覚醒させて早朝より準備と受付に取り掛かりました。フランスの先生方は夜更かしながらも早起きは強いようで続々とオンタイムに会場入りされ、8時30分の開始時には適度に会場は埋まった状態となり早くから熱い討論が繰り広げられました。演題数は口演が83題でそのうちフランス側は31題、ポスター39題については全て日本からのものであったようです。演題数としてはフランス側からも結構集ったと思われるのですが、同じ先生が複数発表されている例もあり、発表者数としては少し寂しかったのではないかと思います。未曾有の経済危機のためスポンサーが見つからないため日本まで来れないという理由もあったようです。しかし藤原先生、青木先生、早稲田先生達ともあとで話したのですがフランスからの若手参加者が伸び悩んでいるように感じます。私もオーバー40で決して若くはないのですが、我々がもっと若手同士の交流を広げて参加者を募っていく必要があると思いました。(といてOlivier Guyen先生やDumas Julien先生を飲み連れ出したのですが・・・)もとい、演題の内容ですが私はTHAの演題を中心に聞いていたのですが、特にnavigationについてフランスはpracticalな方法をとっていると感心しました。現在の日本のTHA navigationはCT basedが主流であり精確さはありますが術前のレジストレーションなどが煩雑であり特殊な施設でしか使えない状況であると思われます。対してフランスはCT freeがメインであり多少精確さに劣っても手っ取り早く目的を果たすために使えればいいんじゃない！というようなコンセプトがあるのではないかと思います。リヨンのOlivier Guyen先生が発表されたROMを最大限にしてインピンジをなくす位置にカップとステムの挿入位置をリアルタイムで画像でナビゲートしてくれるシステムは素晴らしいアイデアだと思いました。初日の招待講演はパリのLaurent Sedel先生がセラミック・



オン・セラミックの長期成績について話されました。ウェアが少なく長期成績が安定していますが、やはり破損は懸念されることであり最近ではノイズの問題が出てきているということでした。

熱い討論は夕方まで繰り広げられ、メインイベントであるプールサイドでのガラディナーに突入のはずでしたが、不幸にもここでスコールに見舞われ室内での開催となりました。しかしワイン部長である青木先生が調達された極上ワインとおいしい料理があれば屋外であろうと屋内であろうと変わりません。琉球ダンスも披露されみんなで参加して「ハイサおじさん」を踊り、楽しく夜はふけていきました。

2日目の学会は昼まででしたので早くに終わり、七川先生がクロージングリマークをされ無事学会は終了いたしました。このあとフランスの先生方と観光ツアーに赴き、夜は那覇市内で最後の宴が催されました。次回学会は2011年5月下旬から6月初旬になんとボルドーで開催されることが決まったようです。アカデミックでありかつ楽しいこの会を盛り上げるべく是非次回も参加させていただきたいと思います。最後に運営の労をとっていただいたスタッフの皆様、本学会開催のために寄付をくださった多数の先生方、スポンサー企業の皆様方ありがとうございました。

**Congress at a glance**

**May 29th (Thu)**

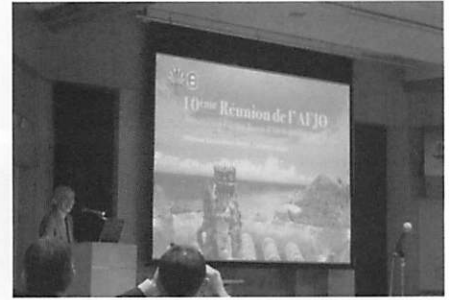
	Room B1	Room B3-4
8:30	Opening remarks	
9:00	THA 1	
9:30	(J) S. Iida (F) P. Hernigou	
10:00	Navi, CAOS	
10:30	(J) K. Kaneko (F) O. Guyen	
11:00	Café break	
11:30	Invited lecture	
12:00	(F) Prof. L. Sedel	
12:30		
13:00		
13:30		
14:00	Hip	Research
14:30	(J) Y. Yasunaga (F) J.P. Courpied	(J) Y. Semoto (F) P. Hernigou
15:00	TKA	Shoulder, Elbow
15:30	(J) R. Kaneyama (F) J. Caton	(J) H. Kawai (F) C. Cuny
16:00	Café break	Café break
16:30	Knee	Trauma
17:00	(J) A. Kobayashi (F) J. Henner	(J) M. Fujiwara (F) J.-C. Bel
17:30	Pediatrics	Tumor
17:45	(J) K. Aoki (F) J. Henner	(J) K. Fujiwara (F) A. Durandeau

**May 30th (Fri)**

	Room B1	Room B3-4
8:15		
8:30	Hand	
9:00	(J) F. Kanaya (F) A. Durandeau	
9:30	Invited lecture	
10:00	(J) Prof. F. Kanaya	
10:30	Café break	
11:00	Spine	
11:30	(J) I. Yuge (F) P. Merloz	
12:00	THA 2	
12:30	(J) C. Tanaka (F) J. Caton	
12:40	Closing remarks	

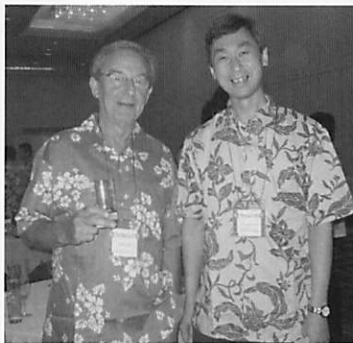
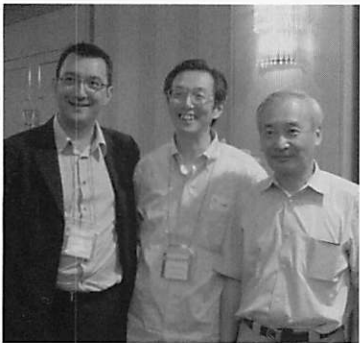


フォトアルバム (1)



第10回  
AFJO

フォトアルバム (2)



フォトアルバム (3)



## リヨン・ニース・アヌシー

行岡病院整形外科

水野直子先生

### はじめに

2008年4月から3ヶ月間(4月Lyon、5月Nice、6月Annecy)、交換研修生としてフランスへ留学させていただきました。以前より、いつかフランスで肩の勉強をしたいと願っていたので、七川先生からお話を頂いたときは、目からウロコでした。そんな理由から、留学中は毎日が夢のようで、帰国時には夢から覚めないで!という思いで泣く泣く帰ってきました。研修は非常に充実しており、フランスのオリジナリティ溢れる肩関節外科学を学ぶことができました。また研修地の風土にも恵まれ(よく場所で選んだのでは?といわ

れますが、偶然です)、旅行や食事を中心としてフランス文化を満喫してきました。この留学生活についてご報告させていただきます。

### Lyon (Centre orthopédique Santy Dr. Gilles Walch)

リヨンはフランス第2の都市で、ローヌ川とソーヌ川が合流する地点にあり、美食の街として有名です。フルヴィエールの丘から見るリヨンの景色は本当に美しく、天気がよければ遠くモンブランを望むことが出来ます(写真1)。



●写真1 フルヴィエールの丘よりリヨンを望む

Centre orthopédique Santyはリヨンの新市街8区に位置し、整形・リウマチ・リハビリ専門医の集うプライベートクリニックです。手術は系列の病院で行われ、朝6時に開始し、午前中だけで肩の手術を5-6件していました。Dr. Walch(写真2)は世界的に有名であり、各国からの見学者を1日に4名まで受け入れていました。そのためいつもinternationalな雰囲気が漂い、見学の先生方とdiscussionし、そのお国事情なども聞けて勉強になりました。手術は反復性前方脱臼に対するLatarjet法、変形性肩関節症に対するTSA、cuff tear arthropathyに対するreverse TSA、腱板断裂に対する鏡視下腱板修復術などが主でした。中でも印象的だったのはLatarjet法とReverse TSAです。Latarjet法は3cmの皮切で、肩甲下筋腱を横割し、基部から骨切した烏口突起をスクリュ-2本でglenoidに固定する術式です。スポーツ復帰は3ヶ月で許可し、脱臼再発率は1%と成績良好で驚きました。Reverse TSAはリヨンのGrammentが開発した術式で、通常のTSAとは反対に、glenoid下半分に半球状のインプラントを設置し、上腕骨側にソケット状のインプラントを設置します(写真3)。骨頭の回転中心を引き下げることで三角筋のlever armを延長させ、挙上が可能となるというコンセプトです。なすすべのないcuff tear arthropathyでも楽々と肩を挙上できるようになり、まさに肩の最終兵器ともいえますが、残念ながら日本ではまだ認可されていません。いずれの症例も術後3日でクリニック近くのリハビリ施設に移り、プールでリハビリを行うことで、早期からよい可動域を獲得していました。

Dr. Walchはいつ寝ているのだろうと思うくらい仕事



●写真2 Gilles Walch先生と

熱心な先生で、手術・外来以外の時間はpaper workをされていました。フランス人はあまり働かないと思っていたので、日本人以上に働いている姿は衝撃的でした。とてもgentlemanで、いつも私のことを気遣ってください、研修初日には、お宅へ招待して頂きました。奥様が画家(先生のpaperの模式図は奥様が書かれています!)ということもあり、モダンな美術館のようなお宅で、手作りのリヨンの郷土料理クネルを初めて食べ、雰囲気満点でした。

リヨンでの生活は、Lyon Part-Dieu駅近くのアパートホテルを借り、velo'vというシティサイクルで通勤していました。最初は近くのカルフルで買出しをして自炊を試みましたが、せっかく美食の街にいるのにもったいないと、すぐにレストラン巡りへ切り替えました(大正解でした)。旧市街にはブションという食堂が軒を連ね、素朴な郷土料理から、美しいご馳走まで幅広く楽しめました。街の人々は皆温かく、私のつたないフランス語にも快く答えてくれ、予想に反し好印象でした。週末にはブルゴーニュ、アビニョン、ボルドーへ足をのばしました。ブルゴーニュではぶどう畑を巡り、カーヴをはしごして、ワインを堪能しました。蔵出しのワインは本当にきれいでおいしく、少々飲みすぎました。対するボルドーはリヨンから離れています。飛行機で1時間なので、一泊で行って来ました。ミーハーな日本人らしく、シャトーマルゴーの前で記念撮影などをしてきましたが、印象的だったのはサンテミリオンでした。小高い丘に中世の街がそのまま残ったような所で、周りは360度ブドウ畑に囲まれていて壮観でした。



●写真3 Reverse total shoulder arthroplasty

## Nice (L'hôpital de l'Archat 2 université de Nice Prof. Pascal Boileau)

ニースは地中海に面したコートダジュールにあるリゾート地です。海岸線が美しく、どこまでも青い海が続きます。ビーチに面したプロムナードデザングレを歩くだけで、身も心もリフレッシュされます(写真4)。

L'hôpital de l'Archat 2はニース大学病院で、海を一望できる高台にあります。大学病院のため、スタッフやフェロー・レジデントの数も多く、アカデミックなscientific meetingが毎週行われます。手術は週3日あり、1日に78件の手術を行います。Prof. Boileau(写真5)は様々なリサーチをしており、手術も多岐にわたります。脱臼、腱板断裂、OA、腫瘍だけでなく、上腕骨近位端骨折や骨折変形治癒にも造詣が深く、オリジナルのlocking nailや変形治癒のための小さなTSAのインプラントを開発していました。Prof. Boileauは常にアイデアに溢れており、現在は鏡視下Bristow-Latarjet法のデバイスを開発中でした。フランスではbiceps long head(LHB)は腱板を痛めつける悪者と考えられており、LHBを切ってしまうことが多く、他国のDr.からbiceps killersと呼ばれています。Prof. Boileauは鏡視下に結節間溝へ作成したソケットへLHBをpull-outし、吸収性のinterference screwで固定する、オリジナルのLHB tenodesisを行っていました。Tenotomyをしないのは、ニースは暖かい

ためノースリーブの期間が長く、筋腹の下垂変形が目立つので、とのことでした。

研修期間中に、Nice shoulder course(写真6)がProf. Boileau主催で行われ、世界54か国から参加者が600名ほど集まりました。3日間で関節鏡、人工関節、骨折についての手技を学ぶセミナーで、講演だけでなく、live surgeryやcadaver work shop、vote形式のdiscussionなどがあり、非常に興味深く有意義なものでした。Faculty dinnerに招待されたので、がんばって着物を着て参加しました。20時開始予定でしたが、ディナーは一向に始まらず、22時過ぎまで屋上で談笑し、その後やっとディナーが開始となりました。時間厳守の日本人文化との違いをひしひしと実感しました。またコースの最終日にはProf. Boileauのお宅でカクテルパーティが開かれました。高台の豪邸で、庭には大きなプールがあり、シャンパンで乾杯……。まるで映画の中のようなセレブリティの世界を体感しました。

ニースでは魚介類がおいしく、これに冷えたロゼがよく合いました。お花市場の周辺に美味しいレストランが多く、足繁く通っていました。週末はモナコ、エズ、ペリニョンなど近くの街や、マルセイユへ行きました。モナコに行ったのはちょうどF1グランプリの直前で、会場が設営されているコースを周り、雰囲気味わいました。コースのど真ん中にあるオテル・ド・パリでランチをし、石油王との出会いを期待しましたが、残念ながら不発に



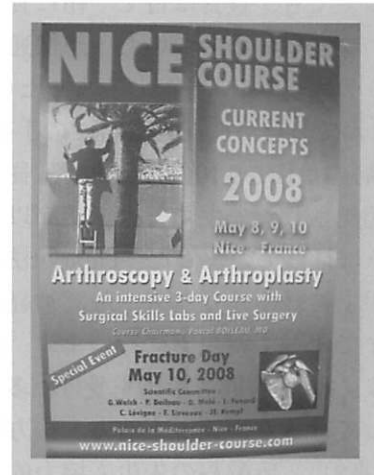
●写真4 ニースのビーチ (5月初旬)

終わりました。エズやペリヨンは、切り立った崖の頂上にあり、遠くから見ると天空に浮かんでいるように見えるロマンチックな村です。中には高級レストランやホテルがたくさんあり、隠れた名所と思われました。マルセ



●写真5 Pascal Boileau先生と

ユへはTGVに乗っていき、途中の地中海の景色が美しかったです。マルセイユはとてもエキゾチックな港町で、ブイヤベースが絶品でした。映画TAXIの舞台ということもあり、プジョーのTaxiがよくマッチしていました。



●写真6 Nice Shoulder Course

## Annecy (Clinique Générale D'Annecy Dr. Laurent Lafosse)

アヌシーは、アルプスのふもとにあるアヌシー湖岸の美しい避暑地です。アヌシー湖は透明度ヨーロッパNo.1を誇り、自然水がおいしいため、レストランでは誰もミネラルウォーターを注文しません(写真7)。旧

市街は、運河が網の目のように走り、おとぎの国のようなかかわいらしさです。また美食の街としても有名で、スイス風のチーズフォンデュやラクレットから、本格フレンチまでいろいろ楽しめました。

研修先はClinique Générale D'Annecyというプライベートクリニックです。研修3ヶ月目ということもあり、フランス語の聞き取りに大分慣れ、スタッフともコミュ



●写真7 アヌシー湖畔にて

ニケーションがとれるようになってきました。手術の助手もさせて頂き、内容的には一番濃厚でした。Dr.Lafosseはとても器用で手術は真剣そのものですが、普段はユーモアにあふれ、よく笑わせてくれました。どんなに忙しくても、昼食は皆で一緒に食べ、きっちりデザート、コーヒーまでついた、想像通りののどかなフランスのランチタイムを楽しみました(さすがにワインはできませんでしたが)。Dr.Lafosseの手術日は週2日あり、1日に肩の手術を9-10件行います。従来の肩関節鏡の概念を超越された先生で、人工関節以外すべての手術を鏡視下に行っていました。Latarjet法はもちろんのこと、肩甲上神経のリリース、腋窩神経の剥離や、広背筋移行まですべて鏡視下に行います。最も印象的だった手術は、他院で7回も手術を受けた多方向性肩不安定症に対して行った、鏡視下前方・後方同時骨移植術でした(写真8)。麻酔科の先生も協力的で、麻酔は斜角筋間ブロックのみで患者さんはawakeなのに、出血を抑えるため、血圧を80mmHg程度にキープしていました。

この病院にはlive surgeryの設備のある手術室が4つあり、2年に1回、Annecy shoulder courseという肩の手術オリンピックのようなセミナーが行われます。小規模のlive surgery courseは頻繁に行われており、研修中にも南アメリカの十数名の整形外科医を対象として開催されました。ここはフランスなのに、手術もdiscussionも全てがスペイン語で行われ、驚きました(写真9)。コース終了時には、アヌシー湖畔にあるお城のようなDr.Lafosse邸でパーティがあり、まさにラテン系のノリの楽しい晩餐でした。アヌシーではstudioタイプのアパートを借り、30分歩い

て通勤していました。アヌシー湖畔や旧市街を通るので、朝は湖の煌きに癒され、夜は旧市街のレストランで夕食をとり、食後の運動のような感覚で、退屈しませんでした。アヌシーからはスイスやアルプスの山々が近く、週末はジュネーブ、ベルン、ユングフラウ、モンブランへ行きました。アルプス最高峰であるモンブランのエギュー・デュ・ミディ展望台は、標高3,840mで空気が薄く、少し歩いただけで息切れがしました。さらにゴンドラに乗り、氷河を越えてイタリア側のエルブロンネ展望台まで行ってきました。ゴンドラから望むモンブランと氷河は、まさに絶景でした。下山後にシャモニーで飲んだモンブランビールは、濃厚でとてもおいしかったです。研修の終わりが近づくにつれ、どんどんフランスに適應していく自分を感じ、もっとこの国で勉強したい、この国を知りたいと思うようになっていきました。またいつか戻ってこようと心に決め、後ろ髪をひかれる思いで帰国の途につきました。

## ■ ■ ■ 冷めやらぬフランス熱、そして・・・

最後になりましたが、リヨンでお世話になったDr.Walchが、2010年9月から1年間、常勤のフェローとして受け入れてくれることが決まりました。このようなすばらしいチャンスに恵まれたのも、ひとえにこの交換研修のおかげだと思います。この場をお借りして、フランスへ導いてくださった七川先生をはじめ、留学に際し大変お世話になりました役員の先生方に深く御礼申し上げます。またフランスでしっかり勉強し、いざれ恩返しができますよう、がんばりたいと思います。



●写真8 ガイドドリル付で腸骨採取したLaurent Lafosse先生



●写真9 南アメリカの先生方と. 左から2人目がLafosse先生



## 日仏交換研修に参加して

大阪医科大学

渡辺千聡先生

2008年10月から11月の2ヶ月間に2カ所の施設をまわらせていただきました。まずはこの留学の機会を与えていただいた日仏整形外科学会名誉会長の七川歡次先生、名誉会員の小野村敏信先生、会長の小林晶先生をはじめ役員の諸先生方、そして留学先の手配をしていたいただいた瀬本喜啓先生に感謝申し上げます。

## In Toulon

Paris・Orly空港から1時間の飛行で南仏のToulonという町に到着します。Toulonは日本ではあまりなじみがない町ですが、気候はNiceとかかわらず温暖で現地の人には人気があり、近年、仕事を退職した後この町に移り住む人が多いようです。

私は9月30日の夜11時にToulon・Hyeres空港へ到着しました。夜遅いにもかかわらずDr.Marius M.Scarlatは私を待っていてくれました。彼との初めての出会いは2007年Niceで行われた日仏整形外科学会の懇親会でした。留学生なら誰もが知っているジラン敬子さんに紹介されたのがきっかけで、その際にMariusは人柄が良く留学するなら彼のところが間違いないとジランさんが太鼓判をおされたのが留学を決めるきっかけとなりました。もちろんMariusは快く私を招いてくれました。彼はshoulder surgeonであり、Clinique St Michelという病院で1人で診療、手術（看護師が介助）を行っています。また、現在European Journal of Orthopaedic Surgery & Traumatology (EJOST; Springer社)のChief editorとして活躍されています。非常に温厚な人柄で



●Mariusの自宅にてMarius夫妻と

面倒見が良く、私にたっぷり時間を費やしてくれました。彼には“肩”のことはもちろん、上肢の外傷、場合によっては下肢の外傷、またフランスでの医療事情や食べ物やワインのこと、車のこと（彼曰く、TOYOTAは世界一）など、ざっくばらんに話をしてくれました。彼は毎朝車で私を迎えに来てくれ、もちろん帰りは送ってくれます。私の宿舎はMariusが手配してくれたのですが、眺めの良いビーチ沿いにあり週末は10月であるにも関わらず、海水浴客でにぎわいます。彼の家から車で20分ほどの距離ですが、彼のcliniqueとは逆方向です。つまり、私のために毎日往復40分ほどかけて私の送迎をしてくれました。また、ある日、私に自転車を貸すためにわざわざ自宅から自分の大事な自転車を乗って届けてくれました。おかげで、私の宿舎の周囲には店がありませんでしたが、彼の自転車で走り回って食料品や生活用品を調達でき、Toulonでは快適且つ健康に過ごさせていただきました。

また、ルーマニアで行われたフランスとのcombine meetingにも参加させていただきました。Mariusは父がルーマニア人ということもあり、ルーマニア整形外科医との交流があるようでフランス医師団の代表として参加していました。今回のmeetingにはSOFCOT会長のDr.Jacques CatonやProfessor Philippe Merloz、Dr.Michel Cameliなどのフランス整形外科の各分野を代表する先生方も参加され、ご一緒させていただきました。このcombine meetingの目的は、ルーマニアの医療レベルを上げるためにルーマニア整形外科学会が

フランス医師団を招いて各分野の最新の情報を得ることでした。私もフランス医師団の中に紛れ込み2つ演題を発表させていただきました。医療事情の異なる国々の報告を多数拝聴することも出来、私の医療概念をかえる貴重な経験となりました。

フランス滞在中にMariusに勧められ、私がフランスに持ち込んだ肩のECHOに関する発表をEJOSTに投稿することになりました。土日を返上して約3週間で書き上げるとMariusはすぐに校正してくれて投稿。あっという間に2名の査読が完了し掲載していただくこととなりました（彼がChief editorなので当たり前?）。このjournalは彼の努力で最近impact factorがついたようで、ただか1カ月の執筆活動で私の論文を掲載していただき、大変恐縮しています。

Toulonでは内容の濃い滞在となりました。Mariusへの感謝の気持ちは一生忘れることが出来ないでしょう。

## ■ In Lyon

Dr.Gilles Walchに会いに11月1日Lyonの町に降り立ちました。LyonはParis, Marseilleに次ぐ人口の多い町です。Toulonとの気温の差があり、早速MONOPORIX(大型スーパー)でジャケット、セーターを購入しました。Dr.Walchはshoulder surgeonであれば誰もが知っている御高名な先生でフランスの第一人者といっても過言ではありません。Dr.Walchは週2日間を手術日に設定し、それ以外の日は外来と自分の研究や執筆に時間を割り



●Dr.Jacques Catonと（晩餐会in Romania）

当てられています。手術日は朝6時30分に集合し術前検討の後7時から手術を開始。人工肩関節2件と肩脱臼制動術(openでのLatarjet法)2件、その他腱板手術など計6件を1時頃までに完了します。すべての手術手技は洗練されていて、中でも5cm程度の皮切で行うLatarjet法は圧巻で、芸術そのものでした。常に世界各国から手術見学の希望があり、術中は常にDr.Walchの周りを5~6人の外国人が囲んでいる状態で、もちろんその中に私があります。運良く、私は4回ほど介助に入らせていただき、日本では見ることの出来ないReverse TSH(日本だけ?認可されていない肩人工関節で骨頭と臼蓋の形状を逆転させたもの)やその他の芸術を間近に見せていただきました。Dr.Walchの手術中の説明は丁寧であり、すべての見学者が術野を覗けるよう配慮されます。見学者からの愚問(私ではありません)にも決して怒ることなく丁寧に説明をします。Dr.Walchからは治療に対する考え方や手術手技だけでなく医師としての器の大きさにも感服いたしました。また、彼に会うことで肩疾患治療において私の中で混沌としていた部分が少し整理されたような気がします。

月に一度Dr.Walchはアメリカ人のフェローと手術見学を訪れた外国人Dr.を自宅に招き奥さんの手料理(Lyonでは有名なQuenelleというすり身料理)をご馳走されるようで私も一度招かれました。ある日の夕刻、Dr.Walchが書いた地図を頼りに訪れた邸宅はさすがでした。高い塀に囲まれた大きな庭、大きい自動の門扉、城のような家。リビングでシャンパンを頂いた後、大きな円卓のある部

屋に案内され席に着きました。その円卓にはフランス人(Dr.Walchと奥さん)・アメリカ・インド・ブラジル・チリ・イタリア・日本(私)が腰をかけ、話題は各国の医療情勢や政治の話となり、ちょっとしたサミットがDr.Walchの邸宅で行われている雰囲気でした。私は英会話に難があるのに加え、話の内容が難しかっただけにあまり会話に参加できず、気まずい思いで奥さんの手料理を口にしていました。味は覚えていません(フェローのアメリカ人は何度も招待されているため、食が進んでいませんでした)。私以外の外国人は日本の医療や政治に関してまで口を挟んでくるほど情報を持っており、世界の人々の関心は自国だけではなく他国にもあることを知り、いろいろなことで私の無知さを痛感した次第です。これも貴重な経験となりました。

Lyon滞在中に私の母が大腿骨頸部骨折をおこしたため、予定を早めて2カ月足らずで私のフランス留学は終了しました(母はすぐに近医で手術を受け、もちろん経過良好です)。短期ではありましたがこの留学はこれからの私の整形外科医としての生涯に大きな影響を与えることは間違いありません。あらためまして日仏整形外科学会の諸先生、フランスでお世話になったジラン敬子さん、Dr.Marius M.Scarlat、Dr.Gilles Walchに厚く御礼申し上げます。

最後に、第二子の出産10日後に快くフランスに送り出してくれて、また母の看病までしてくれた妻に、ありがとう。



●Dr.Walchの自宅にてDr.Gilles Walchと

## 日仏交換研修帰朝報告

関西医科大学整形外科

浅田 卓 先生

今や日本人の手術の器用さ緻密さは世界でも有数だと言われておりますが、股関節の手術に関わっていく内に、バイオメカニクスが盛んなフランスの股関節手術とはどういう物か、日本の股関節手術と何が違うのか、また、THAで使用するKTplateが開発されたフランスとはどういう国なのか大変興味深く感じるようになって参りました。そんな時に今回のフランス留学の話の頂き、喜び勇んで行かせて頂いた次第です。

今回の留学先は人工股関節の手術を積極的に行っている施設を中心に紹介して頂きました。2009年9月から11月までの3ヶ月間の留学期間中、最初の1ヶ月間はパリのHôpital Cochin、次の2ヶ月間はToulouseのHôpital de Rangueil (CHU Toulouse) で研修させて頂きました。両

病院とも滞在中のTHAの手術には、ほぼ全例清潔で手術に参加することが出来ました。Hôpital Cochinは、今までにも多くの先生方が当学会を通じて留学しておられた病院で、各先生方がかなり詳細に帰朝報告をされているため、それらの報告と極力重ならない様に報告させて頂きます。Hôpital CochinでTHAの手術に入らせて頂くに際して、先ず手術前から驚きの連続でした。

- 1) ヘルメット無しのTHA。日本では人工骨頭の時ならまだしも、THAでは…これには正直びっくりしました。
- 2) 手洗いを2回した後不潔のペーパーで手を拭き、アルコールで手を2回マッサージして手洗いを完了。次に手術中の驚きとしては、
- 3) 術中の洗浄回数少なさ(セメント注入直前を含め)。



●写真1

- 4) ほとんど電気メスを使用しない。
- 5) 白蓋のリーマーをあまり使わず、白蓋のほとんどをノミで削り最後にならす程度のリーミング。
- 6) 術前設計図なし(頭の中で出来ているのかも知れませんが)。
- 7) セメント作成は看護師の仕事。

と、数え上げればキリがないですが、日本で受けてきたTHAの教育との違いを痛感する毎日でした。Courpied先生に術中に色々質問した後、“日本ではこうしている”と日本のことを伝えると、“CochinにはCochinのやり方があり、それでちゃんと成績が出ている。これがCochinの伝統だ。”と解答が返ってきました。ただ、ヘルメットや手洗いに関する簡略化はここ数年の試みで、以前と比べて感染率が上昇したわけではないとのことでした。術式は頑なまでにCochinの伝統を継承し、その一方で無駄なものは削ぎ落とし、新しいことを取り入れる。歴史の重さとそれに裏付けられた自信、そして新しいものを躊躇無く取り入れる勇氣。一概には言えないと思いますが、以上のことからフランス人、いやフランスという国を見たような気がしました。フランス人は幼少時から哲学に慣れ親しむことで、個人個人が独特の人間性を獲得しており、個人と個人の安易な融合を好まず、その結果、何者にも迎合しない独自の技術、文化が育っているように思います。でもその一方で由緒正しきルーブル宮の中庭にガラス張りのピラミッドを建てたりします。また、独自の文化であるフランス料理に和食の食材や技術を取り入れたりもします。フランス人は敬意を表すべき古い物はしっかり見据えた上で、すごく柔軟に新しい物との融合を果たし昇華させます。古い物を何でも潰したがる日本人、新しい物をいち早く取り入れながら古き良き物を昇華させるフランス人(その一方でマニュアル車のように、古いものに固執しすぎて時代の波から取り残されている一面も有りますが)。その考え方の違いが現在の双方の町並み、延いては医療を含めた社会全般に色濃く反映されているように思いました。

次に2ヶ月間お世話になったHôpital de RangueilはToulouse第3大学付属病院で、Toulouseの市内からバスを2本乗り継いで一時間弱くらいの高台にあります。Toulouse市内を一望に見下ろす広大な敷地に恵まれた病院で、整形外科はH2病棟の(日本で言うところの)2

階に有りました。

毎朝7:45からカンファレンスが有り、皆眠い目をこすりながら“Bon jour!”や“Ca vas?”等と言っていました。もちろん、異国人である私も容赦なく呼びかけられるので“Ca vas vien, merci.”等と覚え立てのフレーズをぎこち無い笑顔とともに言っていました。カンファレンスはパリでも同様のことを感じたのですが、国民性なのか大変活発なものでした。意見を言うことがあたかも、出勤のタイムカードを押す変わりといわんばかりの積極さで、いつも日本で何事も起きない様に穩便にカンファレンスを済ませることで頭が一杯の私にとって反省させられる出来事でした。

Hôpital de Rangueilでは毎日5部屋ある手術室を整形外科だけで独占状態でした。毎日、手術は8:30から始まり一部屋あたり毎日4~5例ほど手術をこなしていましたが、Drは若手も含め麻酔がかかり消毒が完了してから手術室に颯爽と現れ、創部を縫い終わるとガーゼパッキングもそこそこに手を下ろし次の手術の準備が整うまで談話室でコーヒーやsweetsを食べながら休憩するというシステムのためかそれほど疲労感を感じずに毎日の手術をこなされていました。

THAの手術はHôpital Cochinと同じく、no helmetと簡素化された手洗いから始まりました。術式は後方アプローチのセメントレスで当施設ではMISに特にこだわっておられ、5cmほどの皮切でTHAを施行しておられました。その無駄の無い手技に加え、セメントレスの為にあっという間にTHAが終了していました。いつも関西医大ではDallのアプローチでセメントTHAを行っているのですが、全く逆の手術方法を観させて頂き大変



●写真2

な勉強になりました。

THAの術中にno helmet故か1回だけ術野から髪の毛が発見されたことがありました。一瞬、自分の毛か！とびっくりしましたが、ブラウンのしなやかな毛髪であったためホッとしたことがありました(私は真っ黒のゴワゴワヘアなので)。ただ、術者がさほど驚いた感じでもなく、生食で術野を軽く洗っただけで閉創していたのには2度びっくりしました。その後、その患者さんがカンファレンスの俎上に出てこなかったところを見ると、幸いにも感染には至らなかったのでしょう。

私は日本の医療現場にしか身を置いたことがないので、日本の医学教育、臨床現場しか知りませんでした。宇宙飛行士が地球を飛び出した時、今まで自分を育ててくれた地球を見てその美しさに感動し、感謝すると同時に緑の減少に伴い砂漠化している醜い現実を目の当たりにし、今後その美しさをいかに守るかを考え始めると聞いたことがあります。留学も同じようなものだと思います。今まで僕を育ててくれた医療現場はもちろんのことですが、日本という国を一度外から眺めるということは、日本の、そして日本人の、美しいところ(今まさに失われようとしています)、醜いところを明確にするという意味ですごく大切なことではないかと思います。それは、取りも直さず僕自身の反省点となり、今後の日本の医療現場で大いに生かされるものと自負します。

今回の留学では、3ヶ月という短さもあり学術的、技術的に何かを得るということは出来ませんでした。まずは日本で教わった医学教育に誇りをもち、日本という国、そして文化に自信が持てるようになったことは大きな収穫だったと思います。その反面、フランス

人やフランスという国から自分の反省すべき所を色々教えて頂いたことも大きな収穫でした。今後、今回見聞してきたフランス人の考え方や生き方の良いところ、悪いところをもっともっと日々の生活や臨床にフィードバック出来た時、今回の留学が本当の意味で実りあるものになると考えます。日本にもフランスに負けない、いや世界に負けないだけの伝統と文化があります。それをいかに大切に守っていくか、そして守るだけではなくそれをいかに昇華させ、次世代に伝えられるかは日本人である私たちに委ねられています。単に古いものを新しいものに置き換えるだけではなく、古き良き物、古き良き文化、古き良き伝統をもう一度見直し新しい時代に則した形で“renovation”することがこれからの時代に求められていることではないでしょうか。最近でこそ日本でも“renovation”と言う言葉が定着してきた感がありますが、フランスでは大昔から自然と“renovation”が行われてきました。一度失われた古いものは取り戻せません。その当たり前のことを知っている国民がフランス人であり、その当たり前のことを私に教えてくれたのが今回のフランス留学でした。

最後になりましたが、フランスでお世話になったHôpital CochinのCourpied教授、Hôpital de RanguéilのPuget教授をはじめ多くの先生方、そしてこのような素晴らしい機会を与えてくださった日仏整形外科の役員の先生方、ならびに飯田寛和教授、そして3ヶ月間快く送りだしてくださった医局の先生方に厚く御礼申し上げます。



●写真3



●写真4

## フランス縦断病院研修記

広島大学大学院整形外科  
山本りさこ先生

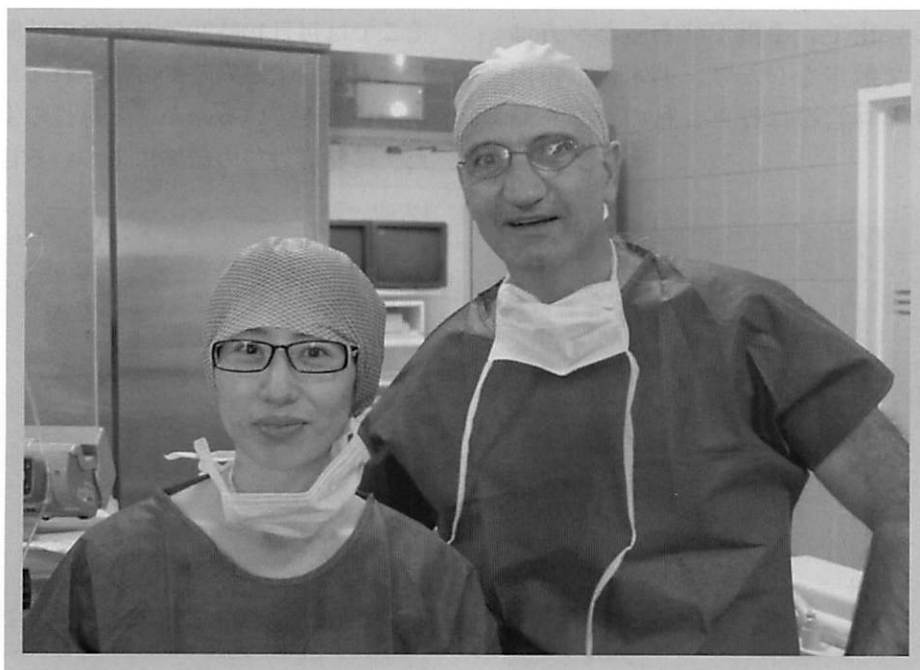
平成21年度の日仏整形外科学会交換研修医として10月より3か月間のフランス研修に行かせていただきました。主にフランスでの側弯症治療、脊椎疾患の治療を学ぶ目的で4か所の病院をまわり、途中パリで行われたフランス整形外科学会(SOFCOT)にも参加してきました。

## Hôpital St. Vincent de Paul (Paris)

ここは側弯の治療で有名なDr.Duboussetがおられた病院で、この研修で多くの先生方が行かれている

Cochin病院のグループ病院です。現在の整形外科部長はPr.Wicart(写真1)で主に四肢の先天疾患を担当されており、今回の受け入れを手配してくださいました。脊椎はDr.Miladi(写真2)が担当されており、高度の側弯症患者さんがベルギー、北アフリカ、ギリシャなどからも診察を受けに来院されていました。

病院は、毎朝7時30分からのカンファレンスで始まり、救急患者と術後患者のレントゲンチェックが行われます。その後病棟回診があり、外来のある火曜日を除いて、毎日手術がありました。Dr.Miladiは側弯の矯正手術は広範囲の固定になるため、脊柱の可



●写真1 Pr.Wicart

動性が失われてしまった患者さんを診察し、なんとか可動性を残したまま矯正したいとの考えで、“自然な脊椎の動きを残したままよりまっすぐに”ということを目標にされていました。最初に驚いたのが術前計画の立て方で、麻酔をかけている間にレントゲンを見た後、その上に皮膚ペンでスクリューを打つ位置、フックを掛ける位置、distractionをかける椎間などをさっと書きこまれ、手術が始まれば看護師もそれをみてフック、スクリューを準備するという息の合った、非常にスムーズな手術でした。毎回神の手とでも言うべきそのセンスと技術に感嘆していました。胸腰椎から仙腸関節までの固定例には、Dr.Dubousset が開発し、Dr.Miladiが改良を加えられたというスクリューとロッドの連結システムがあり、これは成人の変性疾患にも応用可能な非常に強固な固定で、ぜひ日本でも使えるようになってほしいと思いました。またDr.Miladiが週に一度診察に行かれているリハビリテーション専門病院に同行させて頂く機会がありました。パリ市内から車で20分くらいの住宅地にあり、新しく設備の充実した病院でした。リハビリ室はPT室、OT室とも患者の年齢に応じて部屋が分かれており、患者さんに最適な訓練を行えるよう整えられていました。またギプス室とその横にレントゲン撮影室があり、ギプス固定後すぐにチェックできるのでとても便利だとおっしゃっていました。

パリはとても美しい街で、手術が終わった夕方はセーヌ川のあたりまで散歩をしたり、週末には市内の美術館、ヴェルサイユ宮殿に行き、秋のパリを満喫しました。

## ■ Hôpital A. Michallon (Grenoble)

続いて10月末から2週間、紅葉真っ盛りのグルノーブルに行きました。グルノーブル大学Michallon病院の整形外科・外傷外科教授のPr.Merlozのもとで一般整形外科を研修しました。アルプス地方の中心病院で、土地柄、毎日多くの患者さんがヘリコプターで搬送されていました。外傷患者さんが多かったのですが、それとともにComputer assisted orthopedic surgeryを積極的に取り入れておられ、2部屋ある専用の手術室にはナビゲーションシステムが完備されていました(写真3)。液晶モニターが4台あり、ライト一体型カメラによる術野画像、イメージ画像、レントゲン画像などを手術に応じてアレンジできるため、非常に使いやすく設計されていました。Pr.Merlozも電子カルテを自在に使いこなされておられました。このシステムを利用した治療で学会発表も数多くされており、若手の先生が積極的に新しい治療を試みられておられました。また、脊椎圧迫骨折に対する骨セメントを使用した経皮的椎体形成の症例もありました。

滞在中は病院から徒歩10分ほどのMAISON FAMILIALE HOSPITALIEREという患者さんの家族のための宿舎に滞在させていただきました。部屋の窓からは美しいアルプスの山々の景色が広がり、鳥の鳴き声が聞こえ(ヘリコプターの飛ぶ音も聞こえますが)、静かな環境でゆっくり過ごすことができました。またそこでは毎日19時30分が夕食の時間なのですが、食堂では家族同士が病院での話されており、私にも誰の付き添いできているのか?と毎日のように尋ねられました。“整形外科の研修に来ている日本の医師である”



●写真2 Dr.Miladi



●写真3 最新設備の整った手術室



と片言のフランス語で答えると、“この病院は日本と比べてどうか？”と聞かれ、それを説明するフランス語力はなく、とても良い施設だとだけなんとか答えておりました。おかげでフランス語での自己紹介にだいぶ慣れました。またPr.Merlozにはご家族とともに地元で人気のレストランに招待していただき、娘さんとその彼氏も交えてフランスと日本の違いなどを話し合えました。その際、私がフランス人は年齢にかかわらず非常に多くの方が運動をしていてとても良いことだと言うと、娘さんが日本人は運動しないのか？と聞かれた途端、Pr.Merlozが“Pachinko！”と答えられました。確かにフランス人が散歩、運動をして過ごす時間、日本人はパチンコに行っているようだと納得し、Pr.Merlozの日本通ぶりには感嘆いたしました。

## ■ Sofcot 2009 (Paris)

グルノーブルから一旦パリに戻り11月9～13日までSOF-COTに参加してきました。外傷のセッションが多く組んであり、たいいてい聴衆が多すぎて部屋に入れなにか立って聞くほど人気がありました。発表の印象はフランスと日本の治療の現状としてはほとんど共通しており、スポーツを好む国民性のため、高齢者であっても治療の最終目標が高いという印象を受けました。ただ、フランス語の言葉の壁は厚くスライドで内容は多少理解できたのですが、白熱した質疑応答は全くついていけず残念な思いをいたしました。スライドはイ

ラストなどを多用して見やすく、芸術の国ならではの画面構成のセンスの良さに感心しました。

## ■ Hôpital de la Timone Enfant (Marseille)

学会を終え、寒かったパリからTGVで3時間ほどのマルセイユに移動しました。地中海に面した気候の穏やかな港町で、これまでの趣のあるヨーロッパの街並みとはかなり雰囲気が異なり活気のある街でした(写真4)。治安が悪いということを知っていたのですが、実際に地下鉄の駅にはしばしば警察と麻薬捜査犬が取り締まりをしていました。

ここでは小児整形外科のPr.BolliniとPr.Jouveのもとで研修させていただきました。やはり側弯症の患者さんが非常に多く、毎日1-2例の側弯手術があり、椎弓根が細くてペディクルスクリュー挿入できない場合に、テクミロンテープを使用したsublaminar taping systemを多用されていました。Pr.Bolliniはダイナミックかつ正確な手技で手術をされ、また高度の胸椎後弯例に対し開胸前方手術を行わない後方wedge osteotomyを行われたりと、新しい治療にも積極的でした。Pr.Jouveは物静かで落ち着いた雰囲気の中で手術を行われ、無駄な操作がないという印象でした。ここではイタリアのサルデーニャ島カリアリ大学と協定を結んでおられて、Dr.Valeriaが交換研修医として来られていました。サルデーニャ島には小児病院はなく、ここでの研修は非常に素晴らしく、研修できてとてもうれしいと言われていました。彼女は英語が



●写真4 Marseille

少ししか話せず、私もフランス語はほとんど話せない状態にも関わらずいろいろと面倒をみてくれ、イタリア人仲間を呼んだホームパーティに招いてくれ、とても楽しく過ごすことができました。

## ■ Hôpital Neurologique (Lyon, GROUPMENT HOSPITALIER EST ※写真5)

12月に入り、光の祭典でにぎわうリヨンの街に移動しました。12月8日はMerci Marieといって、14世紀にペストが流行した時、リヨンでは MARIA 様に祈りをささげると流行が治まったことから、この日に家々の窓辺にキャンドルを置いて MARIA 様に感謝するというのが始まりだそうです。家々の窓に淡く揺れる光はとても幻想的で美しいものでした。

病院の研修は日仏整形外科学会員の Pr. Guyen の紹介で Pr. Perrin のユニットで脊椎変性疾患を中心に手術に入らせていただきました。Pr. Perrin をはじめ、スタッフの5人中4人が Neurosurgeon で整形外科医は1人でしたが、Pr. Perrin は Neurosurgeon であろうと Orthopedic surgeon であろうと、Spine surgeon という独立した分野で治療するべきであるとおっしゃっていました。症例は腰椎椎間板ヘルニア、腰椎変性すべり症、腰部脊柱管狭窄症が多く、術式のほとんどが後方固定術でした。腰痛がある症例が多く、また除圧を確実にするため固定が必要であるという方針で治療をされていました。後方固定後、偽関節となった症例や、腰痛が改善しないという訴えの患者に対して経腹膜のアプローチによる L3/4~L5/S までの前方固定術を自家骨移植に加え BMP を併用して行われ

ており、これまで見る機会のなかった術式を多数経験することが出来ました。2週間目に入ると、スタッフドクターが多忙なため、手術のほとんどをインターンと二人でこなしていくこともありましたが、インターンもよく訓練されておりその技術に感心いたしました。

12月後半に入ると、ヨーロッパを大寒波が襲い、重たい空と厳しい寒さに日本の生活の快適さを懐かしく思っていました。インターン仲間とともに映画を見に行ったり、クリスマスには Pr. Guyen 夫妻のマンションにカンボジアから来られている Dr. Teng とともに Dinner に招待していただきとても楽しい思い出になりました (写真6)。

## ■ 最後に

当初は3カ月間無事に過ごすことができるか不安を感じていましたが、困ったことといえば大荷物を抱えた国内移動と、散歩中によく道に迷って1時間以上歩きまわったことくらいで、おいしい食事とワイン、たくさんの友人のお陰で人生の充電期間になったと思います。残念だったのはフランス語でのコミュニケーションはやはり難しく、フランス語が話せるともっと充実した研修になったと思いますが、話せなくても相手に興味があること、理解しようという気持ちは伝わり、たくさんのスタッフや患者さん、その家族に声をかけてもらったり、教えてもらうことが出来ました。このような貴重な経験を与えてくださった日仏整形外科学会の役員の方、弓削先生、藤原先生、広島大学大学院整形外科越智教授、広島大学人工関節・生体材料学安永教授、ならびに医局の先生方、誠にありがとうございました。



●写真5 Hopital Neurologique)

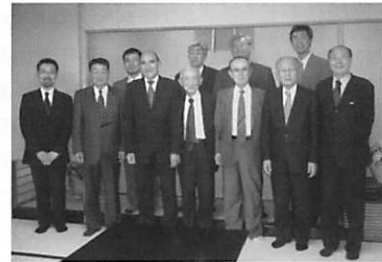


●写真6

## クルピエ先生が日本整形外科学会名誉会員に就任されました

日仏整形外科学会のフランス側の会長を務められたこともあり、また交換研修医のお世話も大変熱心にしていただいているパリのジャン・ピエール・クルピエ先生が日本整形外科学会名誉会員に就任され、2009年5月に福岡で行われました第82回日本整形外科学会学術総会において名誉会員認証状の授与と記念研修講演が行われました。

先駆けて5月13日に日本側役員有志でささやかなお祝いの会をしました。クルピエ先生は非常に親日家であり、日仏の整形外科事情など話が弾みました。



## 日本側・フランス側役員を紹介します

### 日本側役員

名誉会長	七川 歡次
会長	小林 晶
副会長	瀬本 喜啓
書記長	大橋 弘嗣
書記	弓削 至
	青木 清
	藤原 憲太
幹事	坂巻 豊教
	金子 和夫
	安永 裕司
	久保 俊一
名誉会員	小野村敏信
日本側公式連絡員	ジラン敬子

### フランス側役員

President	Jacques CATON (Lyon)
Vice President et Secrétaire General	Philippe MERLOZ (Grenoble)
Tresorier	Philippe WICART (Paris)
Membres du bureau	Philippe LIVERNEAUX (Rochefort)
	Jerome COTTALORDA (Saint Etienne)
	Arain DURANDEAU (Bordeaux)
	Jean Pierre COURPIED (Paris)
	Laurent SEDEL (Paris)
	Olivier GUYEN (Lyon)

あなたも  
フランス研修に!

日仏整形外科学会では、フランス整形外科学会（SOFCOT）との間で青年整形外科医の交換研修を行っております。来年度の研修条件、応募条件等は下記のとおりです。お申し込みください。

本交換研修プログラムの趣旨は、フランスとのコネクションを持たない青年医師に留学先を紹介し、渡航費用と滞在費の一部を援助するというものです。したがって、一度フランス留学を経験しておられる先生は応募をご遠慮ください。

募 集 要 項

1) 募集人員	若干名（平成23年度）
2) 研修条件	<p>1. 滞在期間は3か月間を原則とする。 この間はヴィザが不要であるが、これを越して滞在中の延長に関するすべての手続き（語学学校入学手続きやヴィザ発給のための受け入れ承諾書の依頼等）は自分ですること。 1か月単位であれば複数の施設での研修も可能である。</p> <p>2. フランスでの滞在施設は、希望する研修分野等に応じてフランス側の担当委員が最も適当と思われる施設を推薦する。ただし応募者が特定施設を希望するときは申し出ることができる。 研修期間中の家族の同伴は原則として認められない。 (注意：本制度は大学の若手医師アンテルヌが病院に寝とまりしている部屋に泊まることを原則としている。滞在費用を自己負担する場合はこの限りではないが、家族への宿舎斡旋等に関して過去にさまざまなトラブルがあったため、学会として援助や斡旋は一切行わない。 特にパリにおいてはアパートの契約等に関するトラブルが多く、貴重な滞在期間の多くを宿舎探しに費やすこともあるので、フランスに知人等がいない場合は単身のほうが望ましい)</p> <p>3. 費用について a) 渡航費用の一部を日仏整形外科学会が援助する。 b) フランス滞在中の本人の宿泊費はフランス側が負担する。 ただし家族を同伴する場合は、宿泊費や食費等のすべての滞在費は自己負担とする。 c) 食費およびフランス国内での移動の費用は原則として応募者の負担とする。</p> <p>4. 帰国後、仏語（英語でも可）と日本語での報告書の提出ならびに本会の総会での帰朝報告を行う。</p> <p>5. 本年度の研修開始時期は4月以降とする。</p>
3) 応募条件	<p>1. 応募者は日仏整形外科学会会員であること。 2. 応募者は日本整形外科学会認定医であること。 3. 原則として40才を応募年齢の上限とする。 4. 勤務している病院または施設の責任者の承諾のあるもの。 5. フランス語または英語を話すもの。</p>
4) 応募に必要な書類	<p>1. 日仏整形外科学会交換研修申請書（TXT, PDFをダウンロード・毎年様式が変わるので、注意する事） 2. 履歴書（大学卒業以降とする） 3. 応募の動機や抱負についての小論文 4. 日仏整形外科学会会員1名の推薦状—推薦者は身元保証人に準ずる者と考えること。 5. 業績目録—主な発表論文5編以内（論文の別刷りは不要） 6. 渡航承諾書 a) 大学の医局勤務者……………教授の承諾書 b) 病院または施設勤務者……………勤務している病院または施設の責任者の承諾書 (大学の医局人事により出張中の者は、教授の承諾書も要す。) 以上1. 以外の書式は自由であるが、すべてA4サイズに統一し、上記の順にならべて左上をホチキスで綴じること。また、コピーを10部を同封すること。</p> <p>7. 連絡用住所シール（5枚）……………希望する連絡場所を記入して上記の書類とともに返送すること。 連絡用住所シール（5枚）あて先は～～～先生としてください。</p>
5) 選考方法	<p>1. 第1次審査は書類選考とする。書類審査の結果は平成22年7月上旬に個別に連絡する。 2. 書類選考に合格したのものには平成22年8月上旬に大阪府済生会中津病院において面接を行う予定である。 面接の時間は個別に通知する。 3. 合否は平成22年8月中旬に通知する。 4. 合格者は後日改めて仏文または英文の履歴書等、フランスでの研修に必要な書類が求められる。</p>
6) 申請締め切り	平成22年6月30日必着
7) 申し込み先	<p>日仏整形外科学会事務局 大阪府済生会中津病院整形外科内 〒530-0012 大阪市北区芝田2-10-39 大阪府済生会中津病院整形外科 Tel(06)6372-0333 Fax(06)6372-0339</p>

日仏整形外科学会 係 大橋 弘嗣



# 日仏整形外科学会交換研修申請書

様式 2

H23-1

申請者氏名 \_\_\_\_\_ 性別 \_\_\_\_\_ 年齢 \_\_\_\_\_ 歳

仏 文 姓 \_\_\_\_\_ 名 \_\_\_\_\_

生 年 月 日 \_\_\_\_\_

住 所 〒 \_\_\_\_\_

電 話 番 号 \_\_\_\_\_

勤 務 先 名 \_\_\_\_\_

勤 務 先 住 所 〒 \_\_\_\_\_

勤 務 先 電 話 番 号 \_\_\_\_\_ FAX \_\_\_\_\_

E-mail Address \_\_\_\_\_

研修を希望する専門領域 \_\_\_\_\_

研修を希望するフランス側の機関（病院）があればお書きください。

\_\_\_\_\_

希望する滞在期間 平成 23 年 \_\_\_\_ 月 \_\_\_\_ 日 から 平成 \_\_\_\_ 年 \_\_\_\_ 月 \_\_\_\_ 日

（本年度は4月以降から研修開始とする）

会話可能な外国語（○印をつける）

\*フランス語 \*英語 \*その他（ \_\_\_\_\_ ）

家族について（○印をつける）

\* 同伴する \* 同伴しない

配偶者も医療関係者の方はその職種を書いてください

\_\_\_\_\_

過去に本学会の交換研修に応募歴がある方は、何年に面接を受けたかお書きください。

平成 \_\_\_\_\_ 年

上記の如く日仏整形外科学会交換研修を希望し応募いたします。

平成 \_\_\_\_ 年 \_\_\_\_ 月 \_\_\_\_ 日

氏名 \_\_\_\_\_ 印

# フランス人研修医 受け入れのお願い

本年度も日仏整形外科学会とフランス整形外科学会（SOFECOT）との間で、青年整形外科医の交換研修を実施いたします。

受け入れ期間は原則として3ヶ月間ですが、1ヶ月でも2ヶ月でも結構ですので、是非会員の先生方のおられる施設で、フランス人整形外科医の研修を受け入れて頂きたくお願い申し上げます。

来日するフランス人医師は、英語を話す事が条件になっております。また日仏間の旅費はSOFECOTが支給し、日本での滞在費（宿泊費・旅費）は、日本側（原則として受け入れ施設が）負担することになっております。受け入れを承諾していただける場合は、受け入れ承諾書に滞在条件等をご記入いただき、係までご送付ください。

日仏整形外科学会 会長 小林 晶  
日仏整形外科学会 交換研修係 小林 晶  
連絡先：大阪府済生会中津病院整形外科

〒530-0012 大阪市北区芝田2-10-39  
TEL 06-6372-0333（お問い合わせは大橋弘嗣まで）  
LU7H-OOHS@asahi-net.or.jp



# フランス整形外科医交換研修受け入れ承諾書

様式 1

(日仏整形外科学会 交換研修プログラムによる)

フランス青年整形外科医を対象とした、交換研修プログラムの日本側受け入れを以下の条件のもとで承諾します。(すでに登録されている施設は、変更事項のある場合のみお送りください。)

受け入れ責任者 \_\_\_\_\_

受け入れ施設名 \_\_\_\_\_

住 所 \_\_\_\_\_

電話番号 ( \_\_\_\_\_ )

専門分野 \_\_\_\_\_

受け入れ条件 (該当する項目の□内にチェックして下さい)

\*受け入れ可能な期間 (原則としては3カ月間です)

3カ月間  2カ月間  1カ月間  何カ月でもよい  その他 ( \_\_\_\_\_ )

\*受け入れ可能な時期

月から 月まで  月を除く  常時受け入れる  
 その他 (具体的に \_\_\_\_\_ )

\*受け入れ可能な人数

年間1人  年間2人  年間3人以上  その他 ( \_\_\_\_\_ )  
 同一時期に1人  同一時期に2人以内  同一時期に3人以上  
 その他 ( \_\_\_\_\_ )

\*宿泊設備について

宿泊設備を無料で利用可能  
 宿泊設備を有料で利用可能 (1日 \_\_\_\_\_ 円)  
 宿泊設備は備えていないがホテル等の宿泊費は支給する  
 宿泊設備は備えていない。ホテル等の宿泊費も支給しない  
 その他 ( \_\_\_\_\_ )

\*食事について

施設内で食事を用意する  
 施設内で食事の準備はしないが食費を支給する  
 一部施設内で食事を用意し、一部食費を支給する  
 その他 ( \_\_\_\_\_ )

\*交通費について

交通費を支給する  
 交通費は支給しない  
 その他 ( \_\_\_\_\_ )

\*その他

日本国内の学会等への参加を援助する  
 その他 ( \_\_\_\_\_ )

以上の条件のもとに日仏整形外科学会の青年整形外科医の日仏交換プログラムの日本側受け入れ機関となることを承諾します。

平成 年 月 日

受入責任者 氏名

印

# 第85回フランス整形災害外科学会 開催のご案内 (SOFCOT)

今回、SOFCOTの会長から下記の主題で日仏合同フォーラムを企画する旨の招待状が届き、参加を要請されました。ヨーロッパで日本関係の学会が開催されるのは、滅多にない機会です。多数の先生方の演題ならびに参加を歓迎いたします。なお、演題多数の場合は時間の制限上、会長による選択があるかもしれませんので、あらかじめご了承ください。

## 記

- 【日 時】 2010年11月11日(木) (SOFCOT 会期は11月8日～11日です)
- 【主 題】 運動と患者の自立 (le mouvement et l'autonomie aux patients)  
患者の対象年齢を問わず、保存的あるいは手術的治療などの関連も自由です。  
例えば、人工関節置換術後、あるいは外傷後の運動を通じての自立などがあります。  
リハビリテーション分野とも当然関係があります。
- 【使用言語】 英語、仏語、日本語(同時通訳あり)
- 【時 間】 口演時間10分、討論5分
- 【場 所】 パリ、パレ・デ・コングレ (Palais des Congrès)
- 【演題抄録】 400語 (A-4) 以内 (抄録は英語あるいは仏語)
- 【演題締め切り】 2010年6月末日
- 【応募方法】 演題抄録は下記事務局へメールにWordファイルを添付して送りください。  
採用の可否については改めてお知らせいたします。  
日仏整形外科学会事務局 (大阪府済生会中津病院整形外科内)  
〒530-0012 大阪市北区芝田2-10-39  
TEL 06-6372-0333 FAX 06-6372-0339  
e-mail : LU7H-OOHS@asahi-net.or.jp (大橋弘嗣)

# 第11回日仏整形外科合同会議 開催のご案内 (111ème Réunion de l'AFJO)

第11回日仏整形外科合同会議は2011年にAlain DURANDEAU先生が会長となられてボルドーで行われます。日程など詳しいことが分かりましたらお知らせいたします。

ボルドーはワインの有名な産地であることは言うまでもありませんが、古くから大学があり現在でもヨーロッパ最大の学生町でもあります。また、風光明媚な観光地でもありますので、食事、ワイン、観光も十分楽しむことができます。

多くの先生方、ご家族の方の参加をお待ちしています。



# 第14回日仏整形外科学会

(14ème Réunion de Société Franco-Japonaise d'Orthopédie)

## 開催のご案内



第14回

# 日仏整形外科学会

Société Franco-Japonaise d'Orthopédie; SOFJO

開催日：2010年9月25日(土)

会場：広仁会館

(広島大学霞キャンパス)  
広島市南区霞1-2-3

会長：安永裕司

(広島大学大学院医歯薬学総合研究科  
人工関節生体材料学教授)



### 特別講演

Dr. Philippe Hernigou (Hôpital Henri Mondor, Paris)

Dr. Pierre Chambat (Centre Orthopédique Santy, Lyon)

Dr. Jacques Caton (Clinique Emilie de Vialar, Lyon)

小林 晶 先生 (福岡整形外科病院)

### シンポジウム

交換研修帰朝報告

一般公募演題

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/clione>

事務局：広島大学大学院医歯薬学総合研究科人工関節生体材料学  
〒734-8551 広島市南区霞1-2-3 TEL: 082 257 5980 FAX: 082 257 5980  
E-mail: [clione@hiroshima-u.ac.jp](mailto:clione@hiroshima-u.ac.jp)

全員懇親会の案内ならびに演題募集要項は学会ホームページに掲載しております。

1



## 日仏整形外科学会ボランティアグループ 「パピヨン」 に入会しませんか

———Equipe bénévole pour la SOFJO (AFJO)———

日仏整形外科学会の活動を支えていただくために1996年4月に結成されました。

まず1996年4月13日・14日に東京で開催された第4回日仏整形外科合同会議のお手伝いをするために10数名の先生や関係の方々に登録していただき、会議の開催に協力していただきました。

今後も日仏整形外科学会の運営をお手伝いしていただける先生ならびに一般の方々にボランティアとしてご登録いただき、可能な時間にお手伝いをお願いしたいと思っております。

日仏整形外科学会の会員または会員1名の推薦を受けた方なら誰でも入会できます。

日常的な簡単な英会話ができれば、フランス語は必ずしも必要ではありません。もちろんフランス語のできる方は大歓迎です。シンボルマークは蝶のマークです。

Papillonに関するお問い合わせ、入会申込は日仏整形外科学会事務局、大橋弘嗣まで。

2



Welcome to So.F.J.O Homepage  
ようこそ日仏整形外科学会 (SOFJO) のホームページへ

日仏整形外科学会のインターネットホームページのアドレスは

<http://www.sofjo.gr.jp/>

です。

是非のぞいてみてください。

- ・沿革
- ・活動内容
  - 入会のご案内
- ・役員紹介
- ・共同研究
- ・交換研修
- ・日仏整形外科協議会 (AFJO)
- ・日仏整形外科学会ボランティアグループ
- ・関連リンク集
- ・SOFJO の Top Page へ

## 平成20年度会計報告

歳入の部	(単位：円)
一般会員年会費	998,000
賛助金	1,130,000
広告料	870,000
預金利息	1,152
前年度繰越金	1,488,115
計	4,487,267

## 平成21年度事業費予算編成

歳入の部	(単位：円)
一般会員年会費	1,200,000
寄附金	1,300,000
広告料	800,000
預金利息	800
前年度繰越金	2,791,791
計	6,092,591

歳出の部	(単位：円)
日本人交換整形外科医奨学金	0
フランス人交換整形外科医奨学金	42,065
SOFJO/AFJO開催関係費	0
日仏整形外科学会関連事業（表彰など）	0
日仏共同研究、研究助成金	0
森崎日整形外科学用語集編纂事業	28,900
インターネットホームページ維持管理費	365,100
コンピューター関連費	0
日仏整形外科学会事務局費	
通信費	95,186
事務費	1,386
アルバイト代	0
会議費	24,144
旅費・交通費	147,960
連絡員費用（ジランさん）	100,000
印刷費	889,875
雑費	860
出金小計	1,695,476
次年度繰越金	2,791,791
計	4,487,267

歳出の部	(単位：円)
日本人交換整形外科医奨学金	
渡航費＋滞在費（一部）200,000×3名	600,000
フランス人交換整形外科医奨学金	
滞在費（2ヶ月）＋交通費 100,000×2名	200,000
SOFJO/AFJO開催関係費	1,000,000
日仏整形外科学会関連事業（表彰など）	100,000
日仏共同研究、研究助成	200,000
森崎日整形外科学用語集編纂事業	300,000
インターネットホームページ維持管理費	450,000
コンピューター関連費	100,000
事務局（通信費、事務費、アルバイト代）	
通信費	150,000
事務費	100,000
アルバイト代	300,000
会議費	100,000
旅費・交通費	500,000
連絡員費用（ジランさん）	100,000
印刷費	1,100,000
予備費	100,000
出金小計	5,400,000
次年度繰越金	692,591
計	6,092,591

## 4

### これまでに交換研修に 参加された先生方

研修年度	氏名	所属医局
1990	稲毛 昭彦	大阪医科大学
1991	三輪 隆	帝京大学
1991	末松 典明	旭川医科大学
1992	星 忠行	弘前大学
1992	村上 元庸	滋賀医科大学
1992	久保 俊一	京都府立医科大学
1993	小浦 宏	岡山大学
1994	西川 真史	弘前大学
1994	岩崎 幹季	大阪大学
1995	石澤 命仁	滋賀医科大学
1995	安永 裕司	広島大学
1996	安間 基雄	順天堂大学
1996	寺門 淳	千葉大学
1996	仁平高太郎	慶応義塾大学
1997	益田 和明	岐阜大学
1997	金子 和生	山口大学
1998	山川 徹	三重大学
1998	岡本 雅雄	大阪医科大学
1999	清重 佳郎	山形医科大学
1999	川崎 拓	滋賀医科大学
2000	宮本 敬	岐阜大学
2000	藤井 一晃	弘前大学
2000	細野 昇	大阪大学
2001	鳥飼 英久	千葉大学
2001	久我 尚之	九州大学
2002	瀧川 直秀	大阪医科大学
2002	松峯 昭彦	三重大学
2003	柘原 俊久	昭和大学藤が丘病院
2003	矢吹 有里	慶応義塾大学
2004	和田 孝彦	関西医科大学
2004	久留 隆史	広島大学
2004	小山内俊久	山形大学
2005	小田 幸作	高槻赤十字病院
2005	松尾 篤	九州大学
2006	小室 元	阪和住吉総合病院
2006	城戸 顕	奈良県立医科大学
2006	早稲田明生	国際親善総合病院
2007	益田 宗彰	総合せき損センター
2007	黒住 健人	高知医療センター
2007	菊池 克久	滋賀医科大学整形外科
2008	水野 直子	行岡病院
2008	金澤 博明	順天堂浦安病院
2008	渡辺 千聡	大阪医科大学
2009	浅田 卓	関西医科大学
2009	山本りさこ	広島大学
2010	塚本理一郎	湘南鎌倉人工関節センター
2010	奥村 法昭	滋賀医科大学

## 5

### これまでにフランスから交換研修医として 来られた先生方と研修施設

研修年度	氏名	研修病院名
1991	Philippe LEVEREAUX	京都府立医科大学・広島大学
1991	Luis Michel COLLET	大阪医科大学・滋賀小児センター・福岡こども病院
1992	Frederic DUBRANA	福岡整形外科病院・九州大学
1992	Marc CHASSARD	慶応義塾大学・東海大学・札幌医科大学
1994	Philippe WICART	山口大学・金沢大学
1994	Philippe RENAUX	滋賀医科大学・岡山大学
1995	Michel NINOU	大阪医科大学・新潟手の外科研究所・広島大学
1997	Bernardo Vargas BARRETO	国立小児病院・岡山大学・国立大阪病院
1997	Sylvie MERCIER	大阪医科大学
1998	Jérôme COTTALORDA	大阪医科大学・福岡県立粕屋新光園
1999	Olivier CHARROIS	滋賀医科大学・京都市立病院
1999	Eric HAVET	滋賀医科大学
2001	Laurent JACQUOT	福岡整形外科病院・慶応義塾大学・高岡整志会病院
2001	Alexandre ROCHWERGER	大阪医科大学・山形大学
2004	Brice ILHARRBORDE	総合せき損センター・大阪市立大学
2007	Damien Breitel	総合せき損センター・奈良県立医科大学
2007	Sybille Facca	弘前大学・山形大学・京都府立医科大学・広島大学
2008	Thomas Apard	山形大学・大阪府立母子保険総合医療センター
2009	Francois Lintz	京都市立大学

## 6

### 日仏整形外科学用語集改訂について

日仏整形外科学用語集は森崎直木先生が編集を行われ、1989年に第1版が文光堂から出版されました。その後、1991年に改訂版が出版されましたが、森崎直木先生が亡くなられて以降、改訂されることなく現在に至りました。フランスの整形外科を知るためにはどうしてもフランス語の論文を読む必要がありますので、森崎先生の日仏整形外科学用語集は非常に有用な辞書でした。しかし、医学の進歩に辞書も追いついていく必要があると考え、日仏整形外科学会が中心となって用語集の改訂を行うことにいたしました。

現在、編集委員で分担して新語の追加を中心に改訂を進めています。第一の目標はインターネット上で使用できる用語集を作成することにしており、その後本として出版できればと考えています。初めてのことで、ご意見やアドバイスがございましたら事務局までご連絡をください。

## 7

賛助金を頂戴いたしました。  
ご協力ありがとうございました。

サントリーホールディングス株式会社  
サノフィアベンティス株式会社  
中外製薬株式会社  
参天製薬株式会社  
日本メディカルマテリアル株式会社  
第一三共株式会社  
アステラス製薬株式会社

(順不同)

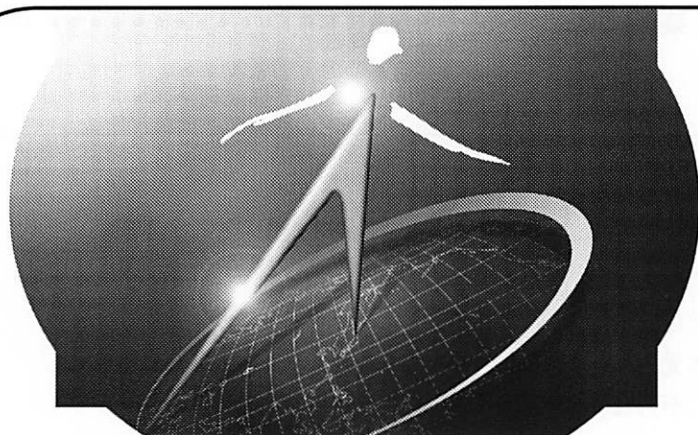
## 編集 後記

気がつけばこのINFOSは今回で第20号を迎えました。日仏整形外科学会は1987年に設立され、1991年に澤田出先生が発行者となられて第1号が発行されました。その後、毎年1回ずつ発行されるようになり、1994年の第3号から私が発行者として引き継いで参りました。その間、交換研修医の帰朝報告をはじめ会員の先生方からの原稿や写真をたくさんいただき、徐々に紙面も充実して参りました。ご協力に感謝するとともに、今後ともよろしく願いいたします。

さて、昨年5月に第10回日仏整形外科合同会議が沖縄で開かれました。たくさん写真を撮りましたが、その中から選んで掲載いたしました。日仏両国間の整形外科の交流とともにお互いに楽しく過ごせた様子をごらんになっていただければと思います。今回の帰朝報告は4名の先生方からいただきました。いずれも生々しい体験が伝わってきて最も楽しみなコーナーです。

今年は9月25日に安永裕司先生が会長として第14回日仏整形外科学会を広島で開かれます。学会のホームページもできていますので、多くの演題をお待ちしています。また、Caton先生の提案によって例年11月に行われていますフランス整形災害外科学会(SOFCOT)に日仏合同フォーラムが企画されることになりました。ヨーロッパで日本関係の学会が開催されるのは、めったにない機会です。多数の先生方の演題ならびに参加をお待ちしています。

(係 大橋弘嗣)



**ARTZ<sup>®</sup>**  
**ARTZ Dispo<sup>®</sup>**

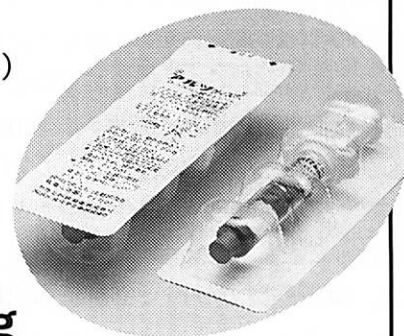
**関節機能改善剤** (ヒアルロン酸ナトリウム関節内注射液)

指定医薬品 処方せん医薬品 注意—医師等の処方せんにより使用すること

**アルツ<sup>®</sup> 関節注25mg**

指定医薬品 処方せん医薬品 注意—医師等の処方せんにより使用すること

**アルツ<sup>®</sup> ディスポ<sup>®</sup> 関節注25mg**



**ブリストア<sup>®</sup> 包装内滅菌済**

特許登録—日本国特許第3831505号；第3845110号(医療用滅菌包装における滅菌方法)

(製造販売元) 生化学工業株式会社  
東京都千代田区丸の内1丁目6-1



**ADOFEED<sup>®</sup>**

**経皮吸収型鎮痛消炎貼付剤**

指定医薬品

**アドフィード<sup>®</sup>**  
**パップ40mg/80mg**

(フルルビプロフェン製剤)

(製造販売元) リードケミカル株式会社  
富山県富山市日俣77-3

- 各製品の効能・効果、用法・用量、禁忌、使用上の注意等の詳細は、製品添付文書をご参照ください。
- 各製品共、薬価基準収載



**科研製薬株式会社**

[発売元・資料請求先] 〒113-8650 東京都文京区本駒込2丁目28-8

07L4  
(2008年9月作成)



# DCM-J Natural-Hip™ System

セメントステムによる  
新しい解決策の提案です。



## 製品特徴

DCM-J Natural-Hip™ システムは、幅広いバリエーションから、症例毎に最適なデザインを選んでいただけます。

- 日本人の CT データに基づいたステム設計
- 2 種類のオフセットバリエーション
- CDH 用ステムバリエーション
- 2 種類のセメント層を選択可能
- 回旋安定性と強固な固定をもたらすステムデザイン
- 広い可動域をもたらすユニークなネックデザイン

Designed to optimize placement and fixation

販売名：DCM-J(デュアルセメントマントル ジャパン)  
医療機器承認番号 21800BZY10057000



## ジンマー株式会社

本社 〒105-0001 東京都港区虎ノ門四丁目1番17号神谷町プライムプレイス7階  
Tel. 03-6402-6600(代表) Fax. 03-6402-6620  
<http://www.zimmer.co.jp>

### ●カスタマーダイレクト (商品のご注文)

北海道・東北・関東地方  
中部・近畿地方 …… Tel. 0550-89-8522 Fax. 0120-89-3570  
中国・四国・九州地方 …… Tel. 092-931-7297 Fax. 092-931-7303

●修理のお問合せ …… Tel. 0120-33-8507

●製品のお問合せ …… HIP …… Tel. 03-6402-6601

薬剤と服用上の注意が  
一体となったプリスターカードが  
2009年度「グッドデザイン賞」と  
「日本パッケージングコンテスト  
適正包装賞」を受賞しました!



- グッドデザイン賞:財団法人日本産業デザイン振興会が主催する総合的なデザイン評価・推奨制度。毎年1,000を超える企業やデザイナーから約3,000件の新しいデザインが応募され、審査されます。
- 日本パッケージングコンテスト:優れたパッケージとその技術を開発普及することを目的として、社団法人日本包装技術協会の主催で毎年開催されているコンテストで、日本のパッケージの最高水準を決定するものとなっています。



骨粗鬆症治療剤・骨ページェット病治療剤

劇薬・処方せん医薬品<sup>注)</sup>

**ベネット<sup>®</sup>錠 17.5mg**

リセドロン酸ナトリウム水和物錠

薬価基準:収載

注)注意—医師等の処方せんにより使用すること

- 効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等は、添付文書をご参照ください。

(資料請求先)

▲武田薬品工業株式会社 〒540-8645 大阪市中央区道修町四丁目1番1号

<http://www.takeda.co.jp/>

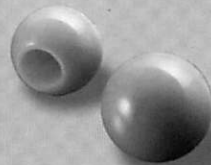
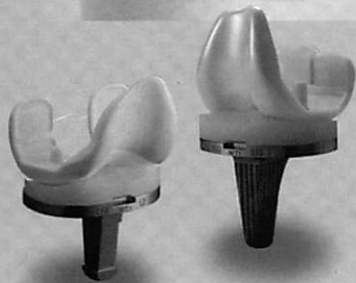
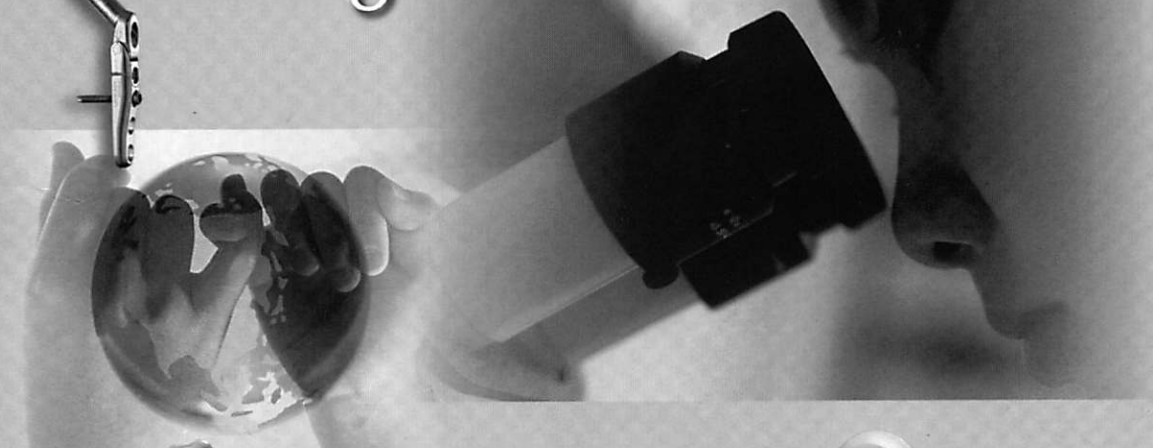
(0911)



**JMM** JAPAN  
MEDICAL  
MATERIALS



*Creating Healthier Future*



## 日本メディカルマテリアル株式会社

大阪市淀川区宮原3丁目3-31(上村ニッセイビル9F) 〒532-0003

<http://www.jmmc.jp/>

東京支社 東京都新宿区西新宿2丁目4-1(新宿NSビル10F) 〒163-0810  
Tel:03-5339-3645 Fax:03-3343-3097

札幌営業所 Tel:011-280-6020 Fax:011-281-6525  
東北営業所 Tel:022-216-5176 Fax:022-216-7116  
大宮営業所 Tel:048-640-7779 Fax:048-641-5828  
名古屋営業所 Tel:052-930-1481 Fax:052-938-1377  
京都営業所 Tel:075-353-4322 Fax:075-343-3118

大阪営業所 Tel:06-6350-1017 Fax:06-6350-8157  
神戸営業所 Tel:078-230-2531 Fax:078-230-2536  
岡山営業所 Tel:086-803-3620 Fax:086-225-2289  
広島営業所 Tel:082-212-1003 Fax:082-211-3008  
九州営業所 Tel:092-452-8140 Fax:092-452-8177

患者さまのためのホームページ

**?** 関節が痛い  
[kansetsu-itai.com](http://kansetsu-itai.com)



<http://kansetsu-itai.com/>

listen. respond. deliver.

メドトロニックソファモアダネックは、脊椎疾患用医療機器と手術支援用ナビゲーションシステムを提供しています。

当社の製品は、優れた技術力、迅速な対応やサービスで多くの専門ドクターから高い信頼を得ています。

私たちは、患者さん一人一人に合った製品を提供し、多様化するドクターのニーズに応えていきます。



製造販売業者 許可番号:27B1X00036

**メドトロニック ソファモアダネック 株式会社** <http://www.sofamordanek.co.jp>

本社 〒553-0003 大阪市福島区福島7-20-1 KM西梅田ビル3階 TEL.06-6453-3444(代) FAX.06-6453-3464

札幌	TEL.011-746-2644(代) FAX.011-746-5123	名古屋	TEL.052-212-3636(代) FAX.052-212-3656
仙台	TEL.022-723-0870(代) FAX.022-723-0871	北越	TEL.076-238-5687(代) FAX.076-238-5713
東京	TEL.03-5148-8621(代) FAX.03-5148-8623	大阪	TEL.06-6453-3488(代) FAX.06-6453-3490
埼玉	TEL.03-5148-8621(代) FAX.03-5148-8623	京都	TEL.075-256-8316(代) FAX.075-256-8317
千葉	TEL.03-5148-8621(代) FAX.03-5148-8623	岡山	TEL.086-224-9688(代) FAX.086-235-8460
横浜	TEL.045-222-3721(代) FAX.045-681-7366	福岡	TEL.092-418-1800(代) FAX.092-418-1811

MEDTRONIC  
Spinal and Biologics Business  
Worldwide Headquarters  
2600 Sofamor Danek Drive  
Memphis, TN 38132  
1800 Pyramid Place  
Memphis, TN 38132  
(901) 396-3133  
(800) 876-3133  
Customer Service: (800) 933-2635  
[www.sofamordanek.com](http://www.sofamordanek.com)

IRN12905

 **Medtronic**



骨粗鬆症治療剤(ミノドロン酸水和物錠)

薬価基準収載

# ボノテオ錠 1mg

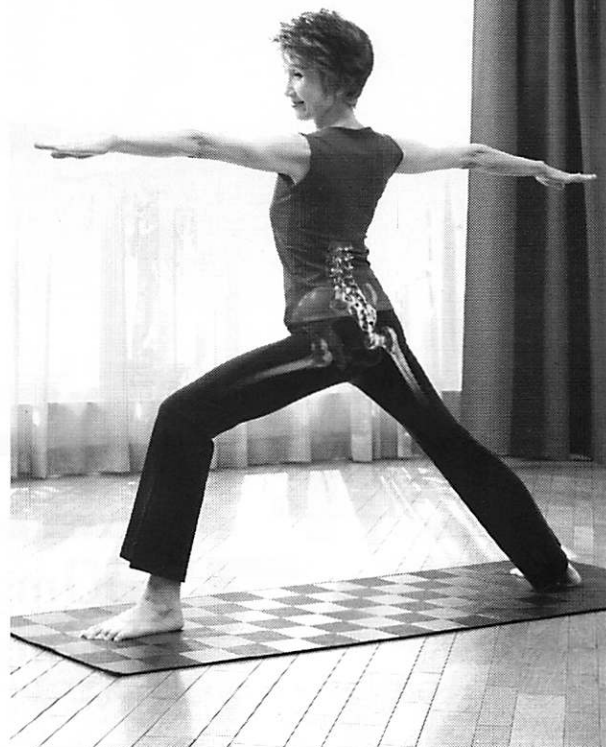
創薬、処方せん医薬品  
(注意—医師等の処方せんにより使用すること)

Bonoteo®

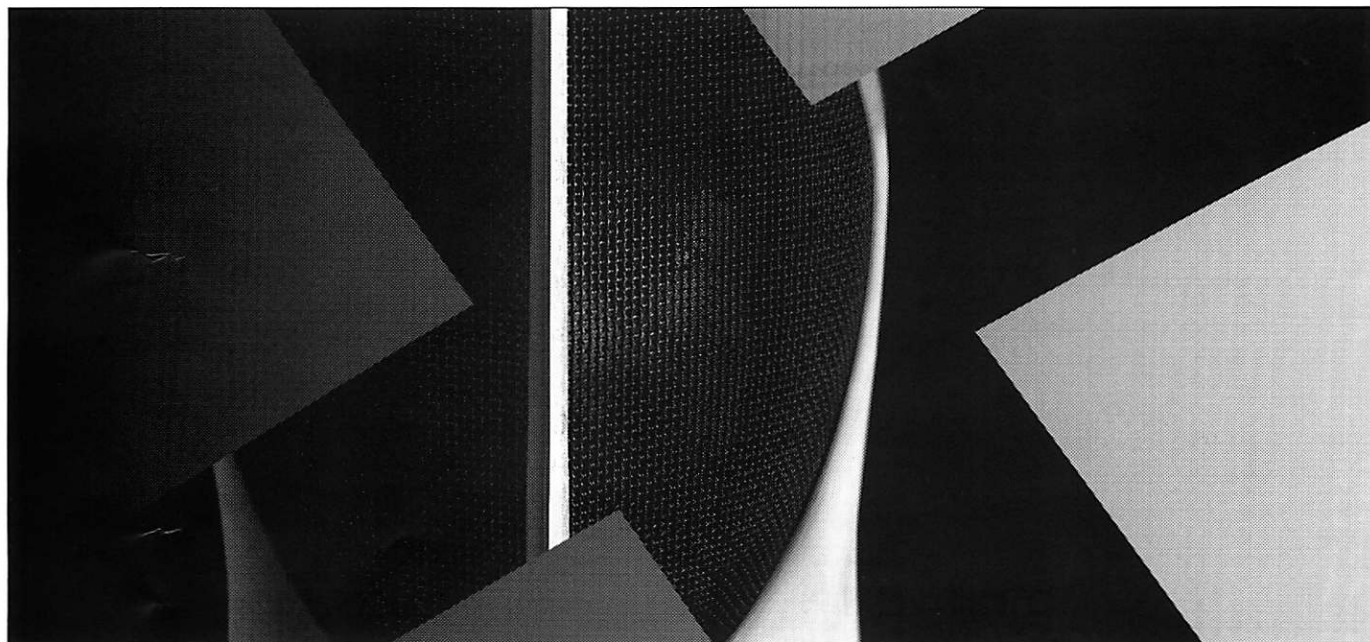
■「効能・効果」「用法・用量」「禁忌を含む使用上の注意」等につきましては、製品添付文書をご参照ください。

製造販売 **アステラス製薬株式会社**  
東京都板橋区蓮根3-17-1

〔資料請求先〕本社/東京都中央区日本橋本町2-3-11



09/4作成 A41/2.A.01



カルバペネム系抗生物質製剤 ————— 処方せん医薬品<sup>注1)</sup> 薬価基準収載

# フィニバックス® 点滴用0.25g キット点滴用0.25g

**FINIBAX®** (注射用ドリベナム水和物 略号: DRPM)  
注1) 注意—医師等の処方せんにより使用すること

■「効能・効果」、「用法・用量」、「禁忌」、「原則禁忌」、「使用上の注意」等については添付文書等をご参照下さい。

製造販売元〔資料請求先〕



**シオノギ製薬**

大阪市中央区道修町3-1-8 〒541-0045  
電話 0120-956-734 (医薬情報センター)  
<http://www.shionogi.co.jp/med/>

Ⓢ: 登録商標 2009年10月作成 A42





骨粗鬆症治療剤

薬価基準収載

# ボナロン錠 35mg

Bonalon® Tablet 35mg <アレンドロン酸ナトリウム水和物錠>

劇薬・処方せん医薬品(注意—医師等の処方せんにより使用すること)

※効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については、添付文書をご参照ください。

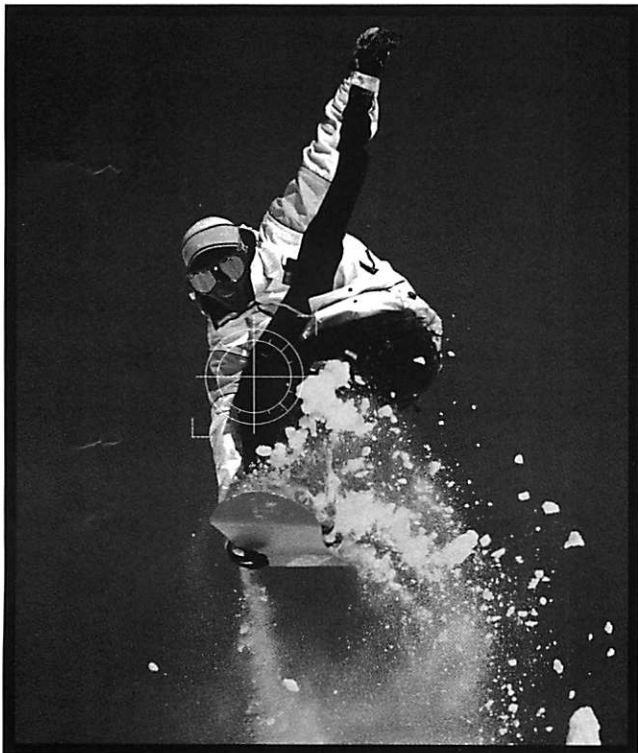
製造販売元

**TEIJIN** 帝人ファーマ株式会社

資料請求先：学術情報部  
〒100-8585 東京都千代田区霞が関3丁目2番1号

商標 **ボナロン/Bonalon** is the registered trademark of Merck & Co., Inc., Whitehouse Station, NJ, USA.

2009年7月作成  
BNW095 (KK) 0907改1



経皮鎮痛消炎剤

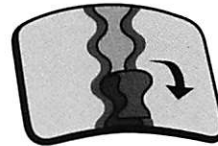
薬価基準収載

モ-ラステプ 20mg

モ-ラステプ<sup>L</sup> 40mg

【ケトプロフェン2%】

はりやすいからこのカタチ。



3ピース中央剥離方式

○効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については、添付文書をご参照ください。

資料請求先  **祐徳薬品工業株式会社** 学術研修部  
福岡市博多区冷泉町5番32号 オーシャン博多ビル8F  
TEL.092-271-7702 FAX.092-271-6405

